HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	松浦武四郎研究の現状と課題 ： 新たなる武四郎像の構築に向けて
著者	三浦，泰之; MIURA，Yasuyuki
引用	北海学園大学人文論集(65)：8-31
発行日	2018-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

松浦武四郎研究の現状と課題
── 新たなる武四郎像の構築に向けて ──

三　浦　泰　之

■松浦武四郎（1818～1888）の生涯

○三浦氏　今，ご紹介いただきました北海道博物館の三浦と申します。本日はよろしくお願いいたします。会場を見渡すと諸先輩方がたくさんいらっしゃいまして，かなり緊張していますが，おつき合いのほどよろしくお願いいたします。

これから1時間ほどお時間をいただきます。武四郎のことを初めて聞くという方もいらっしゃるかと思いますので，まず前半部分でその生涯を簡単にご紹介した上で，後半で武四郎研究の現状と課題について私が考えていることをお話ししたいと思っています。

まず，松浦武四郎の生涯ということで，武四郎はどういう人かという話をさせていただきます。

武四郎は，文化15年（1818）2月6日に，現在の三重県松阪市小野江町というところで生まれました。今，生家の近くに，松浦武四郎記念館という博物館がありまして，松浦家に伝来した武四郎の資料を管理・保管，展示・公開しています。

紀州徳川家領の飛び地だったわけなのですけれども，地士（郷士）という，そこの村役人的なことをやっていた松浦桂介という人の三男（第4子）として誕生しました。

2018年は，「北海道150年」ということも言われていますけれども，松浦武四郎にとっても生誕200年を迎えるという年になっています。

そして，松浦武四郎の誕生地，生まれた家，武四郎のお兄さんが跡を継

いだ家ですけれども，そちらが現存していまして，2018 年の 2 月に公開するということで松阪市が整備を進めているところです。

武四郎さん，北海道を含めて，さまざまなところを旅して歩いたということでよく知られているわけですけれども，幼い頃から旅への憧れを育んでいました。ちょうど生家の前の道が伊勢街道と言いまして，伊勢神宮に通じる街道なのですが，武四郎が 10 代前半のころに，文政のおかげ参りという，日本各地から半年間で 500 万人くらいの人が伊勢神宮にお参りに来るという出来事もあり，日々，家の前の道を往来する多くの人びとの姿を見て，旅への憧れを募らせていったのではないかというふうに言われています。

16 歳の時には，突然家出し，1 か月ほど江戸に滞在したこともありました。そして，翌年，17 歳の時から，日本各地を放浪というか，旅して歩くことになります。北は東北の仙台から南は九州の鹿児島まで名所旧跡を中心に，いろいろなところへ行っています。

16 歳の家出の直後に親類に送った手紙が松浦武四郎記念館に残っています。武四郎はどちらかというと字がきれいではなく，悪筆で同時代から知られていたのですが，それはさておき，ここには，「私は，これから，江戸，京，大坂，長崎，唐または天竺まで行ってみようか」という，日本を飛び出して旅をしたいという強い憧れが記されています。

21 歳の時，武四郎は九州の長崎に滞在していました。そこで大きな病を患うのですが，周囲の人びとのお世話で快復したことへの感謝の気持ちから，一時期，出家をして，お坊さんをしています。その後，お坊さんとして長崎で 26 歳まで過ごしているのですが，その間，長崎の町役人から，ロシアという国が日本の北にあり，南下してくる危機があるという話を聞いて，蝦夷地の踏査を志したというふうに言われています。

その後，武四郎は，28 歳から 41 歳にかけて，6 回にわたって蝦夷地を踏査するわけですが，この 6 回は，前半の 3 回と後半の 3 回に分けられます。性格が違うのです。

前半の 3 回，1 回目から 3 回目の蝦夷地踏査から見ていきたいと思いま

すけれども，これは，28歳から32歳の時です。一介の志士というか，一個人として蝦夷地を訪れたのが最初の3回です。

このとき武四郎の念頭には何があったかというと，長崎で抱いたロシアに対する危機感，同時代的には「海防問題」と呼ばれましたけれども，この海防問題への強い関心がありました。

ただ，当時の蝦夷地は，松前藩が実質的に統治をしていて，ふらっと行って，ふらっと調査できるような場所ではありませんでした。そのために，松前藩の役人とか，松前藩の下で場所の経営を請け負っていた商人にコネクションを作って入っていくということをしています。

ちょっと具体的な動向を見ていきたいと思いますが，最初の踏査は，箱館の商人・和賀屋孫兵衛という，道東方面の場所を請け負っていた商人の手代という名目で，東蝦夷地と呼ばれていた地域，主に太平洋岸を中心に，知床岬まで足を運んでいます。

2回目は，松前藩の医師の西川春庵の従者となって，今度は日本海側，西蝦夷地を経て，北蝦夷地と呼ばれていたサハリン（樺太）の南のほうにも足を伸ばし，オホーツク海岸を経て，やはり知床岬まで赴いています。

3回目は，松前の商人・柏屋喜兵衛という，やはり道東方面の場所を請け負っていた商人の船に水夫として乗り込み，色丹島から国後島，択捉島を巡っています。

そして，彼は，特に誰に頼まれて踏査をしたわけではないのですが，この3回の旅の様子を『蝦夷日誌』と題した全35巻の書物にまとめています。草稿というか原稿というか，松浦武四郎記念館に残っているわけですけれども，松前藩の蝦夷地統治が非常に杜撰であること，その中で，アイヌ民族が非常に苦しい生活状況に置かれていることを指摘しています。さらに言えば，このまま松前藩に蝦夷地を任せていては危ないというようなことも書いているのです。

とはいえ，アイヌ民族の生活文化など，各地で目にしたもの耳にしたものなども書いていますし，近藤重蔵とか村上島之允とか，武四郎より前の世代で蝦夷地を調査した人たちの文献なども引用したりして，言ってみれ

ば，それまでの蝦夷地をめぐる情報の武四郎なりの研究史整理というか，そういった位置付けの本でもあります。

そして，この『蝦夷日誌』をまとめた後，武四郎はどうしたかというと，まず最初に，ちょっと時間は置くのですけれども，水戸藩，当時，徳川斉昭という御隠居さんがかなり力を持っていましたが，その水戸藩に，まず最初に献上します。その後，仙台藩や，四国の宇和島藩などにも献上したことが知られています。

そういった中で，武四郎，彼は伊勢国の出身ではありますけれども，旅に出ていないときは，基本的には江戸で暮らしていましたが，その江戸において，武四郎は，「蝦夷地通」というか，蝦夷地について非常に詳しい人物として次第に名が知れ渡るようになっていきます。

なお，武四郎は，個人としての３回の踏査を終えた後，『蝦夷語』（松浦武四郎記念館所蔵）というアイヌ語の語彙集をまとめています。その序文には，最初はアイヌ語が全然わからなかったが，３回目には日常会話には不自由しなくなったというようなことが書かれています。蝦夷地への旅を志したきっかけは海防問題で，基本そういう関心から日誌をまとめているのですが，アイヌ民族やその文化そのものにも次第に強い関心を寄せていったのではないかと思います。

次に，６回の踏査の内，後半３回についてお話ししたいと思います。39歳から41歳の時，安政３年から５年，1856年から1858年にかけて行いました。前半の３回は個人としての踏査でしたが，この後半の３回は幕府の「御雇」という立場で踏査をしています。

ちょうど１回目から３回目，そして４回目から６回目の旅の間にどんなことがあったのかというと，教科書にも出てくるような，いわゆる黒船の来航という出来事がありました。アメリカ東インド艦隊司令長官のペリーがやって来て，幕府に開国を求める。そして同じ年に，長崎にロシアの海軍中将のプチャーチンが来て，やはり幕府に開国と北方域での国境画定を求めました。

そういった中で，嘉永７年（1854），後に安政元年と改元された年には日

米和親条約，日露通好条約が結ばれて，箱館の開港も決まりました。そして，幕府は，安政2年（1855）2月に，それまで松前藩が統治していた蝦夷地全域を松前藩から取り上げて，直接支配するようになる。北方域の国境問題を意識して，蝦夷地開拓を企図していくのです。

そんな政治上の動きがあって，当時，蝦夷地通として名前が江戸を中心に知れ渡っていた武四郎に白羽の矢が立ち，安政2年（1855）12月25日付で武四郎は幕府の「御雇」になる。そして，その立場の中で3回の蝦夷地踏査をするということになります。

踏査の具体的な行程を見てみたいと思います。幕府の「御雇」として最初の踏査，都合4回目では，幕府が松前藩から蝦夷地の支配を引き継ぐという政治的な儀礼が行われた時，箱館奉行支配組頭の向山源太夫という役人が，蝦夷地を，北蝦夷地，サハリン（樺太）の南のほうも含めて，ぐるっと一周するという機会に，武四郎はそれに随行する形で，蝦夷地と，サハリン（樺太）の南部を，海岸線を中心に巡っています。

5回目では，幕府から「蝦夷地一円山川地理等取調方」という命を受けました。要するに，蝦夷地の地理的な状況などを調べなさいということです。その「御用」として，この年は，主に西蝦夷地のほう，日本海側を中心に石狩川の上流域まで行き，天塩川も上流域までさかのぼるなど，内陸部を含めて踏査しました。

最後の6回目は，彼の踏査の中では一番期間が長く，広範囲にわたっています。この時も「蝦夷地一円山川地理等取調方」の「御用」ということで，石狩川上流域から美瑛，富良野の辺りを抜けて十勝地方へと越え，釧路と網走間，道東地方を縦断するなど，川筋を中心に内陸部も含めて，広範囲に踏査をしています。

改めて，幕府の「御雇」としての武四郎の踏査の目的をまとめると，蝦夷地開拓を目論んでいた幕府の命を受けて，蝦夷地の地理的な状況や，アイヌの人びとの生活状況，松前藩による統治以来どういう生活状況に置かれているのかということ，また，新道切り開きの可能性，つまり蝦夷地開拓を進めていく上で，新しい道をつくるとしたら，どこからどこまでをつ

くるのが良いのかといったことを調べることでした。また，特に内陸部では，アイヌの人びとの道案内や世話を受けながらの調査でもありました。

そして，それぞれの旅ごとに幕府の箱館奉行所へ，踏査の様子をまとめた報告書を提出しています。全部で116巻に及びます。ちなみに，４回目と５回目の報告書については，冒頭に「箱館御役所」という幕府の箱館奉行所の蔵書印と考えられる朱文方印が押されているものが知られていて，武四郎が箱館奉行所に提出した原本と思われます。

さて，以上のように６回にわたって蝦夷地の踏査をした武四郎はどんな人物だったのでしょうか。その人物像がうかがえるエピソードをご紹介したいと思います。もちろん，非常に健脚で，情熱もあり，行動力や好奇心も旺盛だろうということは容易に想像できるかと思いますが，それだけではない側面も，同時代の資料からはうかがえます。黒船が来た後，水戸藩としても，蝦夷地がどういうところか調査しようということになりました。その中で，豊田天功という学者がその任を受けるわけですけれども，その豊田が徳川斉昭に提出した意見書（草稿）「松浦武四郎推挙の呈書稿」（茨城県立歴史館寄託高橋清賀子家文書）についてご紹介したいと思います。まだ武四郎が幕府の「御雇」になる前，「蝦夷地通」として評判が広がっていた頃の話です。かいつまんで言うと，その中で，豊田は，武四郎について，「この時勢下，蝦夷地のことを一番明らかにしているのは松浦武四郎という人物が第一で，まさに「有用の人物」である，ただ，武四郎は，プライドが高く，いつも自信満々だと，また，世間のそしりを受けるような暮らしぶりであるとも聞こえてくる，とはいえ，蝦夷地に３回も渡るというのは，「尋常平和穏当の性質」ではできることではなく，それだけの根気もある男で，一くせあって当たり前である」と記しています。これは武四郎を推薦するための文章なので，別に悪口を言っているわけではないのです。その意味でも，この豊田の武四郎評，この当時，武四郎は30代後半くらいですが，おおむね間違っていないのかなと思います。かなり強烈な個性の持ち主でした。

さて，６回目の蝦夷地の踏査を終え，江戸に戻ってから１年ほどして，

彼は幕府の「御雇」を辞めています。辞職願いでは病気を理由にしていますが，幕府への失望感もあったのではないかと考えられます。その後は，基本的には江戸暮らしなわけですけれども，蝦夷地との関わりでは，自身の見聞を世間に広く紹介するために，かつ自身の生計を立てるためにという目的もあったと思いますけれども，精力的に蝦夷地関係の著述を出版しています。彼は生涯でおよそ80件ほどを出版していますが，その内，蝦夷地関係は45件に及びます。彼の出版した蝦夷地関係の書物は，京都や大坂でも「多気志楼物」と称されて「大流行」したようで，そのおかげで妻と楽な暮らしができるようになったと，自身手紙に記しています。この「大流行」の背景には，日本社会における蝦夷地への関心の高まりもあったのではないかと思います。

『石狩日誌』や『十勝日誌』などの地域名を冠した日誌類や，26枚の切り図を並べると縦240 cm，横360 cmくらいになる巨大な北海道の地図「東西蝦夷山川地理取調図」，また，ちょっとくだけたというか，「新板蝦夷土産道中寿五六」といった双六も刊行しています。蝦夷地の各地域の，彼が名産と思ったものや，アイヌの人びとの暮らしなどを，それぞれのコマに描いています。現在の様似ではアイヌの人びとが狩猟に用いる仕掛け弓，三石では今でも日高昆布として有名な昆布，沙流では義経神社のことに触れています。幌泉（えりも）には大きなタコがいたというようなことも書いています。

また，武四郎の代表的な著述に『近世蝦夷人物誌』があります。これも出版を意図しましたが，幕府の許可が下りずに，それは叶いませんでした。全3編9巻の中で，彼が踏査の途中で出会うなどした100名ほどのアイヌの人びとの伝記やエピソードが紹介されています。松前藩以来の場所請負制の中で疲弊していたアイヌ社会の様子を厳しく指摘するとともに，そういった中でも，例えば，非常に親孝行な高い倫理性を持った夫婦や，カリスマ性の高いリーダーの話題など，活き活きとした生活の様子も描写しているのです。

やがて，江戸時代が終わり，時代は明治へと移り変わっていくわけです

けれども，この時，武四郎は新政府に登用されます。新政府は，成立当初から，ロシアとの国境問題を念頭に，蝦夷地の開拓を国家の威信に関わる非常に重要な課題と位置付けていました。そういった中で，慶応４年（1868），大政奉還が慶応３年末なのですけれども，改元して明治元年になる年，慶応４年閏４月に，51 歳の武四郎は，箱館府判府事という役職を命じられます。幕末以来薩摩藩ともつながりがあり，そのつながりの中で，維新の元勲の一人である大久保利通が強く武四郎を推したと言われています。この時はまだ，大久保と武四郎は面識はなかったようですが。

ただ，戊辰戦争，そして，箱館戦争が落ち着かないという状況の下で，新政府も蝦夷地の開拓に本格的に着手できず，武四郎も東京府関連などの全然別の用務に従事しました。そして，明治２年（1869）５月に箱館戦争が終わると，６月には「蝦夷開拓御用掛」の一人となり，７月に開拓使という役所ができると，やがて開拓判官を命じられるなど，東京詰の幹部役人として明治政府の北方政策に関わりました。明治２年（1869）８月 15 日には，太政官布告で，蝦夷地を北海道と改め，北海道に 11 の国と 86 の郡を置くことが決まりましたが，それらの名称について提案するなどしています。

しかし，武四郎はそんなに長く新政府にいたわけではありません。翌明治３年（1870）３月に辞表を出して辞めています。武四郎は，辞表に，新政府に雇われる時に条件を３つ出したと書いています。一つは，松前藩を北海道から追い出すこと，もう一つは，場所請負制を廃止すること，最後は，蝦夷地というか北海道を各藩に分領支配させて開拓を進めるべきであること，です。その内，分領支配は，明治２年（1869）から４年（1871）までという短い期間でしたが実現しました。ただ，松前藩は転封にはならず，場所請負制も廃止はされましたが，武四郎の目からすれば実態は変わっていないように映った。また，東久世通禧という開拓使の長官とどうも反りが合わなかったようで，自分抜きでさまざまな話が進められているというようなことも書いています。いずれにしても，そんな自身の境遇を嘆くような辞表を書いて新政府を辞めています。

その後，新政府は，武四郎に，辞職の直後ですけれども，北海道開拓への貢献を賞して「終身十五人扶持」を贈っています。１人扶持というのは大体１日あたり米５合分の金額に相当します。15人扶持なので，１日あたり米75合という計算になります。これを終身ということなので，それなりに，年金ではないですけれども，晩年の生活費には困らないような立場にはなっています。

武四郎には，辞職の後から名乗り始めたとされる雅号がありまして，それは「馬角斎」です。当時，江戸城「馬」場先門の向かいの「角」地にあった岩倉具視の長屋に住んでいたことから名付けた雅号であると自身で説明していますが，「ばかくさい」という思いもあったのかなと思います。

これまで，北との関わりを中心に，武四郎の生涯をたどってきましたが，実は，全然北海道と関わらない部分でも，武四郎の生涯は非常に魅力的だと思います。例えば，亡くなる前の年，明治20年（1887），70歳の時に生涯二度目の富士山登頂をしたとか，最晩年まで毎年主に西日本方面へ２～３か月間の旅を繰り返しています。そういった旅人生だったりとか，黒船来航当時，尊王攘夷派の志士的な活動を行い，非常に熱心に黒船情報を収集して「情報通」としても知られていたとか，当時，古い書画骨董品などを収集する「好古家」と呼ばれる人びとが数多く活動していたのですが，その中でも全国有数の知名度を誇っていたとか，知られざる一面も持っています。

幕府の奉行クラスの役人から知識人・文人に至る非常に幅広い交友関係を築いていたということもありますし，さまざまな彼の活動を支えた，旺盛な好奇心や情熱，強烈な個性も，非常に興味深いところです。武四郎の人生は，そんな数多くの魅力を秘めています。

以上，あくまでも私なりにですが，簡単に武四郎の生涯をふり返ってみました。

■松浦武四郎研究の現状と課題

①松浦武四郎記念館所蔵の松浦武四郎関係資料

それでは次に，武四郎研究の現状と課題といった話題に移りたいと思います。武四郎はこれまでどのような形で調査研究されてきて，今どのような状況にあるのか，また，今後，武四郎にまつわる調査研究をしていく上ではこのような課題があるのではないか，といったことについて，私なりの考えを述べさせていただきます。

まず最初に申し上げておきたいのは，松浦武四郎記念館という博物館のことです。武四郎のお兄さんが継いだ三重松浦家の武四郎関係資料，例えば武四郎が実家に送った手紙や書籍，アイヌ民具などさまざまなものが伝わっていまして，現在，武四郎記念館に収められています。あわせて，武四郎直系，東京松浦家の武四郎関係資料，神田五軒町というところに彼の家があったのですけれども，関東大震災などでおそらく相当数のものが失われてしまったのだろうと思いますが，そのような中でも，大切に，戦時中には資料を疎開させながら守り伝えられてきた東京松浦家ゆかりの資料もありまして，そちらも今，武四郎記念館に収められています。それらの内，約 1,500 点が，平成 20 年（2008）に，「幕末から明治初年の北海道の歴史，地誌やアイヌ史研究等に重要」ということで，国の重要文化財に指定されました。

彼の書いた日誌やさまざまなものが指定されていますが，例えば，彼の日誌には多くの絵が挿まれています。彼は特徴的な風景画を描くのです。ある程度，空間把握能力が長けていたのかなと思うのです。例えば，『初航蝦夷日誌』六（松浦武四郎記念館所蔵）には，有珠山の山頂から洞爺湖越しに羊蹄山を眺めた風景の絵が収められているのですが，結構，場の特徴を捉えているように思います。また，武四郎の同郷の先輩にあたる村上島之允の「蝦夷島奇観」などを参考にしながら，アイヌの人たちの様子なども描いています。個人的に面白いなと思う絵に，『蝦夷訓蒙図彙・蝦夷山海名産図絵』（松浦武四郎記念館所蔵）に収められている，オホーツク海岸，

ノトロでのオヒョウ漁の絵があります。とても大きなオヒョウを獲っています。よく見ると奥のほうに家があるのですけれども，家の脇にも巨大なオヒョウが干されています。その他にも，彼が見た動物，植物などを分類して，それぞれ説明を加えて図説にまとめてもいます。

こうした絵だけを見ても，先ほどの重文指定の理由にもあったように，当時の北海道の歴史や地誌，アイヌ史研究などに対して非常に重要な資料を彼は残しているということがうかがえるかと思います。武四郎より前の時代，近藤重蔵や村上島之允，間宮林蔵とか，そういった人たちも踏査をしていますが，現在に伝わっている資料の量が違います。そして，武四郎の日誌類の大部分は，現在，秋葉實さんなどの精力的なお仕事の中で資料集として刊行され，利用しやすくなっているという状況もあります。

②松浦武四郎関係資料と伝記的研究

明治20年代以降，時代とともに続けられてきた，武四郎をめぐる伝記的研究

そういった武四郎が残した資料と，武四郎をめぐる研究，伝記的研究と書きましたけれども，わりと古くから積み重ねられてきています。彼が亡くなったのは明治21年（1888）の2月ですけれども，それと同じ年，同じ月に，既に武四郎の生涯が簡単にまとめられて記事になっています。日露戦争後に南樺太が日本領になると武四郎が脚光を浴びるといったように，時代とともに武四郎をめぐる伝記的な研究が行われてきました。横山健堂さん，吉田武三さん，花崎皋平さんや秋葉實さんなど，多くの方が研究をされています。

武四郎がどんな文献に取り上げられているのかということを髙木崇世芝さんという方が『松浦武四郎関係文献目録』（北海道出版企画センター，2003年）にまとめておられますが，それを見ると，武四郎に対する膨大な研究がこれまでに積み重ねられてきたことがよく分かります。

その中で，特に北海道との関わりをめぐって，武四郎に対する評価を大きく拾ってみると，「北海道開拓の先鞭をつけた探検家」というような言い回しもありますし，「北進の先覚者」や「北海道の名付け親」という表現も

あります。「北海道の名付け親」というのは，既に戦前の教科書でも取り上げられています。また，アイヌ民族，アイヌ文化の良き理解者であり，ヒューマニストであるというようなことも言われたりしています。

武四郎とアイヌ民族との関係をめぐる両極端な武四郎評

ただ，実は，先ほど手塚さんも触れておられましたように，武四郎をめぐる研究の中で非常に両極端な武四郎の評価がなされています。

まず最初の評価ですが，堅田精司さんという方が「開拓使と松浦武四郎」（『松浦武四郎研究会会誌』第２号，1984 年）という論文の中で，武四郎は勤王の志士的な活動もしていた，非常に国家主義者的な観点からの記録であり，決してアイヌ民族の立場に立った記述などではない，というようなことを書かれています。また，アイヌ民族への同情は，国防上の必要から生じたものであって，あまり過度に武四郎を評価しないほうがよいのではないかという指摘もあります。そうした堅田さんの文章の中で，私が特に重要と考えているのは，「武四郎は，社会のなかで生きてきた人間である。仙人ではない。日本人社会のなかで，さらにアイヌ民族社会のなかで，彼を位置づけなければならない」という一節です。

次にもう一方の評価ですが，花崎皋平さんという方が『静かな大地 ── 松浦武四郎とアイヌ民族』（岩波書店，1988 年）という本の中で，武四郎に歴史的な限界はあるにしても，アイヌ民族の立場に立とうとした，その生き方は学ぶべきであるということを指摘されています。この視点について，基本的には，僕もその通りだなと思うのですが，やはり誰かの生き方に学ぼうとする時，おそらく得てして何かが落ちてしまうことは否めないのかなと思います。例えば，花崎さん，「彼の生涯は，おのれの立身出世のために権力者に媚びたり，民衆を踏み台にしたものではなく，むしろ，民衆の側に立って，権力と資本の搾取・抑圧を告発したものといえよう」と書かれているのですが，私は，史料に則せば，武四郎に全く立身出世欲が無かったわけではなく，一介の浪人として生活が苦しかった時には幕府の「御雇」になるために媚びるようなこともしていたのではないかと思って

いますので，ちょっとこのあたりは踏み込み過ぎではないかと感じます。

いずれにしても，以上の堅田さんの評価も，花崎さんの評価も，どちらも当たっている部分があるのだろうと個人的には考えています。

そうした中，近年，檜皮瑞樹さんという方が「アイヌ統治政策への倒錯した批判 ── 松浦武四郎と『近世蝦夷人物誌』」(『仁政イデオロギーとアイヌ統治』有志舎，2014年）という論文の中で，研究史整理的なことをされています。そこでは,「近世人」, いわゆる江戸時代に生きた人としての「松浦武四郎の思想を，同時代の文脈において捉え直」すことの重要性が指摘されています。個人的にも，今後の研究の方向性はおそらくこういった中にあるのではないかと思っているところです。

③今後の課題と方向性

武四郎資料の批判的検討

そういった中, いくつかの研究がこれまでも重ねられてきていますので, 具体例をご紹介したいと思います。

まず最初に，武四郎資料の批判的検討という話題です。谷本晃久さんという方が分析をされている事例をご紹介したいと思います。武四郎は蝦夷地のことをさまざま書いている中で，西蝦夷地，オホーツク海沿岸地域のことにも触れているわけですけれども，高倉新一郎さんなどの研究の中では，そうした武四郎の記録が引用され，近世後期の西蝦夷地オホーツク海沿岸地域は「強制漁撈労働資源地」として位置付けられ，通説化してきました。武四郎は，例えば紋別とか，その辺りの地域のアイヌの人びとは働ける者は根こそぎ宗谷や利尻・礼文のほうに出稼ぎに送られている，帰ることもできずに地元では村が疲弊している，といった記述を残しているんですね。そこで，谷本さんは，その他の資料，幕府の箱館奉行所モンベツ御用所の簿書などを分析した上で「モンベツ領のアイヌすべてが必ずしも場所請負資本と雇用関係を結んでいた訳ではなく，またソウヤ方面への出稼ぎは青壮年者全体の約半数であった」(「近世アイヌの出稼サイクルとその成立過程 ── 西蝦夷地「北海岸」地域を事例として ──」『学習院大学文

学部研究年報』第45輯，1999年）と指摘しています。これはどういうことを意味しているのかと言うと，要するに，武四郎が多くの記録を残してくれたことは非常に重要で，あるとないとでは大違いなんですけれども，ある地域の歴史を考える上では，可能な限りその他の資料とつき合わせて，武四郎の記録を読んでいくという視点が欠かせない，ということを意味しているのです。つまり，武四郎も，文飾かどうかは別にして，書き過ぎている部分がある，ということです。

同時代文脈で捉える武四郎の思想的背景の検討

またもう一つは，武四郎の思想的背景について，同時代的な文脈の中で理解すべき，という話題です。

例えば，先ほどもお名前を出した檜皮瑞樹さんが『近世蝦夷人物誌』をめぐる研究をされています。その中で，檜皮さんは「武四郎は奉行所官吏や支配人，番人によって強制的に行われるアイヌの帰俗については厳しい批判を行った」と記しています。幕府は，蝦夷地の統治と蝦夷地の開拓を進めていく上で，アイヌの和風化政策を行いました。要するに，例えば，アイヌの人たちに髻を結わせるとか，髭を剃らせるとか，外見を和人のようにさせるという政策が行われたわけです。今，普通に考えれば，本当かなという話ですけれども，例えばロシア船が蝦夷地に近付いて来た時に，和風化したアイヌの人びとの姿を見せることで，ここは日本領だと思わせて上陸を諦めさせるという意図がありました。そういった中で，武四郎は，「強制的に行われるアイヌの帰俗については厳しい批判を行った。一方で，アイヌが公儀の恩頼を感じ，自らが望んで帰俗することは否定されるどころか賞賛の対象とした」と記しています。確かに，『近世蝦夷人物誌』を読むと，そうしたニュアンスのことは非常によく伝わってきます。

根っ子にあるのは，一つは，武四郎が蝦夷地の踏査記録の中で一貫して批判しているのは松前藩であり，松前藩の下で場所請負制を担った商人たちであるということです。もちろん幕府の現地詰めの，彼の目から見てどうしようもない役人のことは批判していますけれども，幕府そのものに対

する批判というのは，武四郎の蝦夷地の踏査記録の中には確認されません。武四郎が幕府の「御雇」という立場であることも多分に影響しているとは考えられますが，蝦夷地の踏査記録の内，幕府に提出した報告書的な日誌の中では，「此度の御所置」の有難さを武四郎はしばしば強調しています。「此度の御所置」とは，幕府による蝦夷地直轄支配，つまりは，幕府が蝦夷地を松前藩から取り上げて直接治めるようになったということを意味しています。それは非常に有難いことだと，蝦夷地の状況はこれまでとは違って良くなっていくのだ，と武四郎は記しているのです。

もう一つは，武四郎は，アイヌの人びと一人一人の意に沿うということを重要視していたのだろうということです。だから，無理やり和風化されることには批判をしているし，例えばアイヌの人びとが自分の身を立てるために，主体的に和語を学び，風俗を改めようとすれば，それはそれで良しとするという，一人一人の意に沿った形であるということが，多分彼の中では大事だったのではないかというふうに思います。その意味でも，幕府による蝦夷地開拓や和風化政策というものに武四郎は決して否定的ではないのです。

武四郎より前の時代からの思想的な流れはありますけれども，武四郎は，蝦夷地の踏査記録の中で，アイヌの人びとに対して，全く別の異民族というよりは「皇国太古の民」という表現を使っています。要するに，中国からの文化的な影響を受ける前の，いにしえの日本人の姿をアイヌは残しているのだ，ということを武四郎は書いているんですね。そういった同時代的な国学思想なども含めて，武四郎の資料は読んでいく必要があるのかなと思います。

武四郎の個性や心情についての検討

また，武四郎の個性とか心情とか，武四郎はどんな人物像であったのか，ということも踏まえながら，武四郎についての研究は深められなければならないとも考えています。

その中のキーワードとして，例えば三つ挙げました。「立身出世願望」，

「自己顕示願望」,「生活の安定への希求」です。

どういうことかと言うと，例えば武四郎が幕府に召し出されて「御雇」になったと，そして，４回目以降の調査が実現した，という話をさせていただきましたけれども，その実現にあたって，武四郎はさまざまなやりとりを幕府の役人たちとしているんですね。伊勢神宮の神官で武四郎の国学の師であった足代弘訓に嘉永７年（1854）４月２日付で送った手紙からその一端がうかがえますが，そこには「先々私事も御召出しニ相成候哉否哉之処は天次第ニ御座候得共，御目附衆より只今迄三航仕候，彼地之義探索致し候事を御申立ニ相成候迄は仕とけ申候，此上は叶とも不叶とも天次第と存居候」という一節があります。つまり，自分がお召し出し ── 幕府の「御雇」になるということ ── になるかどうかは「天次第」だけれども，幕府の目付衆 ── 後に箱館奉行を務めるような実務官僚クラスの人たちのこと ── を通じて，蝦夷地を３回も探索した武四郎という人物がいるということは幕府の老中まで伝えることができた，だから後は，自分が雇われるかどうかは「天次第」なのだ，と書いているのです。不思議なことに武四郎は幕府の奉行クラスと強いコネクション，人脈があるのですが，その人脈を活用して何とか幕府に雇われようとしていることが分かるかと思います。

実際，雇われた後には，幕府に対する報告書であるが故のリップサービスかもしれませんが,「此度の御所置」，幕府が蝦夷地を直轄支配するという中で,「度外の立身出世」をした人たちがいっぱいいる，その列に自分も加わったというのは，いかばかりか，有難いことなのだ，ということも武四郎は書いたりしています。この当時，決して生活も安定してはいなかったでしょうし，そのような意味でも，自分の身をいかに立てるかという願望は自然に武四郎の中にあったのではないかと考えられます。

また，晩年についてなのですけれども，畠山如心斎という東京浅草で古物商をしていた人が武蔵国，今の埼玉県に暮らしていた小室元長というお医者さんに明治 13 年（1880）６月 30 日付で送った手紙があります。畠山は，おそらく武四郎のことが大嫌いでした。武四郎の悪口をつらつら書い

ている中での話なので,ちょっと差し引く必要があるのかもしれませんが,例えば,「昔年北地開拓ノ功ヲ唱へ，人ニ対スル毎ニ己が貯蔵ノ多数且珍奇世上ニ冠タルノ由縁ヲ懇ニ解明スヲ常トシテ，人ヲシテ先驚カシメザル事無キ」という一節があります。この「懇ニ」という点が重要かなと思います。たぶん，武四郎は話が長かった。蝦夷地踏査のことや自身が収集した古物のことを，自慢げに長々と，いろいろな人にしゃべっていたのではないかと思うのです。それは，まあ，よく言えば，情熱的，ということなのですが，武四郎が幕末期に黒船情報などのさまざまな情報を集めて，いろいろな人に同じような内容の手紙を書き送っていたことと根っ子は同じではないかと思います。自分の考えを,一生懸命,人に伝えたいという人だったのではないでしょうか。

こうした，彼を取り巻く手紙とか，よりパーソナルな資料から，“人間武四郎”というふうに書きましたけれども，武四郎の人物像も踏まえて，武四郎の研究が深められていく必要があると考えています。

武四郎の“語られ方”をめぐって

イメージ先行的な武四郎の“語られ方”も，いくつかあるのかなと思っています。恐縮な話，武四郎についてテレビや新聞などの取材を受けることがあるのですけれども，先方さんから，当時アイヌの人びとに対して親しみを持っていた和人は武四郎だけなのですよね，という質問を受けることがあります。でも，決してはそうではありません。例えば，安政4年(1857)，武四郎と同時代に蝦夷地を踏査した，関宿藩士の成石修が著した紀行文『東徼私筆』を見ると，アイヌの人びとは「神代ノ風俗」で「純朴温良友愛ナル事ハ中国ノ人モハヅベシ」と書かれている。もちろん，程度の差はあると思いますし，記録を多く残しているか否かという違いはあると思いますが，武四郎だけが，というイメージばかりが先行することはあまり宜しくはないでしょう。もっとも，アイヌが常にまなざされる対象であるかのような質問の視点そのものにも問題があるとは思いますが…。

また，武四郎の蝦夷地踏査を取り上げる時に，アイヌの人びとの案内だ

けを頼りに道なき道をかきわけた冒険旅行，といったイメージもよく耳にします。確かに，踏査は大変だったと思います。自分が出来るかといえば出来ないでしょう。しかし，例えば，最初の３回の旅であれば，商人の手代，松前藩の医師の従者などの立場で旅をしています。当時，そういう商用や公用で蝦夷地を旅する際のシステム，例えば，運上家や会所といった場所請負商人の拠点施設に宿泊したり，拠点施設間で人夫や馬を出してくれたりするシステムがあったのです。なので，決して冒険旅行ではないということです。ある部分ではシステマチックな，近世蝦夷地を旅する時のシステムの中で，武四郎は旅をしています。幕府の「御雇」の際に精力的に行った河川流域などの内陸部の踏査も，運上家や会所で道案内のアイヌの人たちを選んでもらい，数日間の食料を準備した上で旅をしているという点ではシステマチックです。ただ，海岸部の，拠点施設があるような場所の旅ではない分，かなり厳しい環境での旅であったことは間違いありませんが…。

加えて，武四郎は新政府を辞めてから死ぬまでアイヌ民族のことを気にかけていた，とか，新政策の政策に失望した強い思いがあり，申し訳ない気持ちもあって，晩年は北海道に足を運べなかった，という話もよく聞きます。

しかし，今のところ，私は，武四郎が晩年にアイヌの人びと，北海道への思いを記した文書は確認出来ていません。なにがしかは書いていたのかもしれませんが，現在までに失われてしまったのか，少なくとも，現在，松浦武四郎記念館に収蔵されている武四郎関係資料の中には現存していないと思います。だから，先ほどのようなことは，全て史料的な根拠のない想像なのです。当たっているかもしれませんが，よく分からないというのが正直なところです。

それでも，私の考えを述べさせていただくと，例えば，武四郎が明治８年(1875)，京都の北野天満宮に奉納した大神鏡があります。その背面には，北海道とその周辺地域の地図が彫り込まれているのですが，「幾としかおもひふかめし　北の海　道ひくまてに　なし得つるかな」という，武四

郎と同じく開拓判官であった島義勇との合作の和歌も刻まれています。この和歌からは，ある程度の達成感，自負心が読み取れるのではないかと考えています。江戸時代以来思いを深めてきた北海道のことについて自分は導くまでのことは出来たのではないか，という思いです。また，晩年の旅ということに関しては，67歳の時，明治17年（1884）7月28日付で，幕末以来親交のあった旧熊本藩士の末松孫次郎という人に送った手紙がありまして，晩年の旅をめぐる思いを語っているのですけれども，明治0年代，自分はあまり旅に出なかったので病気がちになった，ふと考えてみると，もともと自分は天下を跋渉して山川を巡り，雨風にもまれながら成長してきた，しばらく安逸に過ごしていたからこそ病気になったのだ，そのために明治12年（1879）から再び旅に出ることにした，いまは古物を集めることとともに，1年の内，90～100日間ほど，「壮年の頃見残し候国々」を巡ることを楽しみにしている，と書いています。ここからは，晩年，北海道のことを常に気にかけていたが行けなかったというよりは，むしろ，「壮年の頃見残し候国々」── 西日本が中心なのですが ── に強い関心が向いた，という心境が想像されるのです。そういった点から，個人的には，武四郎の晩年の胸中には，北海道との関わりに対する達成感と自負心，北海道への旅よりも西日本への旅への興味，といった思いがあったのではないかと考えていますが，いずれにしても，史料上ははっきりと分からないのです。

武四郎がアイヌの人びとに深い関心を寄せていたとか，その境遇に憤りを感じていたことは確かだと思います。武四郎が告発したような問題を場所請負制そのものが構造的に孕んでいることも確かです。そして，武四郎が行動的に情熱的に，強い興味関心の下で数々の記録を残してくれたことも確かですし，スケッチも巧みで，観察者，記録者としての技量が高かったことも確かだと思います。繰り返しになりますが，今後は，今まで申し上げてきたようなことも踏まえて，武四郎の伝記的研究や，武四郎の記録を活用した北方史研究が深められていく必要があるのではないかと，自戒の意味も込めて考えているところです。

伝記的研究を深めていく上でのいくつかの視点

最後に，北海道との関わり以外の話をさせてください。

まずは，ネットワークという視点についてです。例えば，『松浦武四郎研究会会誌』の中で，秋葉實さんが武四郎の「往返書簡」シリーズという資料紹介の連載をしてこられました。武四郎が送った手紙，武四郎が受け取った手紙の紹介です。松浦武四郎記念館には，武四郎が受け取ったり，手に入れた手紙がたくさん残っています。例えば，「灰心余赤」という巻子の中には，長州藩の松下村塾で知られる吉田松陰に書いてもらった紹介状などもあります。また，幕末期に武四郎はさまざまな出版物をつくっていますが，その中には多くの和歌や漢詩，絵が挿まれています。例えば，『西蝦夷日誌』二編には，尻別川河口の渡船場の様子を描いた挿絵があるのですが，上部には小野湖山という人が詠んだ漢詩があります。湖山は，安政の大獄に列座した元志士で，近代以降は武四郎と東京神田五軒町でお隣同士だったという漢詩人です。また，絵は，落款から，おそらく鈴木香峰という人の作だと思います。香峰は，東海道吉原宿，今の静岡県富士市で，脇本陣をしていた人です。このように，武四郎の出版物全体では，詩歌で214名，絵画で117名が和歌や漢詩，絵を寄せています。このような幅広い交友関係に注目すると見えてくるものがありますし，新しい資料が発見される可能性もあります。

例えば，先ほどの鈴木香峰では，脇本陣鈴木家文書が富士市立博物館にあるという情報を数年前に聞いて調査に行きました。そうしたら，何と，武四郎関係の手紙が50通近く見つかったのです。今後も，幅広い交友関係に着目していけば，新しい資料が発掘される可能性は多分にあると考えています。数年前に武四郎関係資料の全国調査を試みたことがあるのですが，まだまだ全然出来ていないので，継続課題にしたいと思っています。

その全国調査の際には，北海学園大学の北駕文庫にもお邪魔しました。例えば，明治44年（1911）８月に皇太子北海道行啓があった際に，皇太子が武四郎の資料を豊平館でご覧になったのですが，そのために，松浦孫太，武四郎のお孫さんに当たる方が東京からゆかりの資料を持参して豊平館に

陳列したのです。北駕文庫に残されている浅羽靖の資料を調べたところ，豊平館における陳列について，浅羽靖が北海道庁への仲介を行っていることが分かりました。浅羽と孫太は知り合いだったのですね。そういった縁もあって，松浦家から浅羽文庫，現在の北駕文庫に寄贈された武四郎の出版物などがあったりします。

また，幕末維新という激動の時代との関わりでは，非常に旺盛な情報収集，発信活動をして「情報通」としても江戸で評判であったことも重要です。例えば吉田松陰は，世の中の新しい情報を得るためには武四郎とつき合うのが良いと，知人への手紙の中で記しています。こうした一面は，あまり知られていないのですが，同時代的にそれほど情報通だったということを，武四郎関係資料の分析や，その他の資料の分析から，幕末維新史の研究の中に位置付ける作業，幕末維新期の日本社会や人物群像の中に位置付ける作業も，今後の非常に大きな課題ではないかと個人的には考えています。

最後は，日本で有数の知名度があった，古物の収集活動という話題についてです。近年，東京の世田谷区にある静嘉堂文庫という三菱関係の岩崎彌之助が創立した文庫から，武四郎旧蔵の古物コレクションが発見されました。武四郎の唯一の肖像写真に写る大首飾りも現存していますし，武四郎が出版した収集古物の図録である『撥雲余興』や『撥雲余興』二集，そして，河鍋暁斎という当代随一の日本画家に描かせた，収集古物に囲まれて気持ちよさそうに昼寝する「武四郎涅槃図」に描かれている品々の一部も，静嘉堂文庫には残っています。今後，武四郎が収集した古物そのものにどのような歴史的な価値があるのかを追求することが重要な課題と言えるでしょう。

なお，武四郎の収集古物の特徴の一つに，武四郎が専用に設えた木箱に収められているという点があるのですが，例えば先ほどの大首飾りが入っていた箱は「馬角」と題された箱です。蓋の裏を見ると，「馬角」の文字は旧幕臣の勝海舟が書いていることが分かります。そして，その両脇の「奇彩千秋／霊光万古」という文字を小野湖山が書いています。こうした古物

の収集活動をめぐるネットワークから見えてくることもあるかと思います。

■おわりに

以上，雑駁な話題を申し上げてきました。私も武四郎についていろいろと勉強している途中なので結論的なことは言えないのですが，これまでの話と絡めて，武四郎の生涯を理解するためのキーワードがいくつかあるかなと思っています。それは，①旅，②旺盛な好奇心と知的・学問的・思想的欲求，③情報の“収集”と“発信”，④幅広い交友関係，⑤強烈な個性（例えば，“自己顕示”），⑥幕末維新期という時代背景，⑦アイヌ民族，蝦夷地（北海道）との関わり，の７点です。来年，2018 年には，北海道 150 年事業として，また松浦武四郎生誕 200 年を記念して，北海道博物館では松浦武四郎の特別展を開催する予定です。現在，その準備も鋭意進めているところなのですが，以上のキーワードをふまえて，今後，私自身も武四郎についての勉強に取り組んでいきたいと考えています。

ちょっと時間を超過してしまい，最後の方は駆け足になってしまいました。申し訳ありませんでした。これで私の話は終わります。ありがとうございました。（拍手）

＊主な引用・参考文献

・横山健堂『松浦武四郎』北海出版社，1944 年
・吉田武三編『定本松浦武四郎』下（三一書房，1973 年）
・吉田武三『松浦武四郎』人物叢書 142，吉川弘文館，1967 年
・堅田精司「開拓使と松浦武四郎」『松浦武四郎研究会会誌』第２号，1984 年
・花崎皋平『静かな大地 ── 松浦武四郎とアイヌ民族』岩波現代文庫，岩波書店，2008 年／1988 年単行本刊行
・松浦武四郎著／吉田常吉編『蝦夷日誌』上・下，時事通信社，1962 年
・吉田武三編『松浦武四郎紀行集』上・中・下，冨山房，1975 年

・秋葉實翻刻・編『校訂蝦夷日誌』【一編】～【三編】，北海道出版企画センター，1999年
・高倉新一郎解読『竹四郎廻浦日記』上・下，北海道出版企画センター，1978年初版／2001年復刻
・秋葉實解読『丁巳日誌東西蝦夷山川地理取調日誌』上・下，北海道出版企画センター，1982年初版／2001年復刻
・松浦武四郎著／秋葉實解読『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』上・中・下，北海道出版企画センター，1985年
・笹木義友編『新版松浦武四郎自伝』北海道出版企画センター，2013年
・松浦孫太解読／佐藤貞夫編集『松浦武四郎大台紀行集』松浦武四郎記念館，2003年
・松浦孫太解読／佐藤貞夫編集『壬午遊記』松浦武四郎記念館，2011年
・松浦孫太解読／佐藤貞夫編集『辛巳紀行』松浦武四郎記念館，2012年
・松浦孫太解読／佐藤貞夫・「武四郎を読む会」編集『癸未溟誌』松浦武四郎記念館，2013年
・松浦孫太解読／佐藤貞夫編集『甲申日記』松浦武四郎記念館，2014年
・福永昭・唐津巳喜夫・佐藤貞夫解読／佐藤貞夫編集『己卯記行』松浦武四郎記念館，2015年
・佐藤貞夫・松村瞭子・唐津巳喜夫解読『明治期稿本集』松浦武四郎記念館，2016年
・高木崇世芝編『松浦武四郎「刊行本」書誌』北海道出版企画センター，2001年
・高木崇世芝編『松浦武四郎関係文献目録』北海道出版企画センター，2003年
・ヘンリー・スミス『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』国際基督教大学湯浅八郎記念館，1993年
・谷本晃久「近世アイヌの出稼サイクルとその成立過程 ── 西蝦夷地「北海岸」地域を事例として ──」『学習院大学文学部研究年報』第45輯，1999年
・山口昌男『内田魯庵山脈〈失われた日本人〉発掘』晶文社，2001年
・三浦泰之「松浦武四郎「刊行本」に挿まれた絵および詩歌について」『北海道開拓記念館研究紀要』第32号，2004年
・笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説 ── 幕末維新期における知識人ネットワークの諸相 ──』北海道出版企画センター制作，2011年
・宮地正人『幕末維新変革史』上，岩波書店，2012年
・内川隆志編『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』内川隆志，2013年

・公益財団法人静嘉堂『静嘉堂蔵松浦武四郎コレクション』公益財団法人静嘉堂，2013 年
・檜皮瑞樹『仁政イデオロギーとアイヌ統治』有志舎，2014 年（第 4 章「アイヌ統治政策への倒錯した批判 ── 松浦武四郎と『近世蝦夷人物誌』」）
・山口県教育会編『吉田松陰全集』第 8 巻，岩波書店，1939 年
・三雲町史編集委員会編『三雲町史』第 3 巻資料編 2，三雲町，2000 年
・三浦泰之「〈古物〉収集家としての松浦武四郎に対する同時代評についての一史料」『松浦武四郎研究会会誌』第 61 号，2011 年
・秋葉實「松浦武四郎往返書簡（46）」『松浦武四郎研究会会誌』第 62 号，2011 年